

魔女と王様

とつても小さな九つの国——3

あわなみりようさく

53 炎の魔女

「ああっ」

「おい！」

兵士たちがたづなを引き寄せるまもなく、炎に怯えた馬たちは背後に走り去ってしまいました。ニーダマは背の矢筒から一本の矢を抜き、弓につがえると声を張り上げました。

「臆病者の魔女どもよ、聞くがいい！」

ニーダマは襲いかかる火の粉を恐れず、まばたきもせず弓を引き絞ります。おたおたとしていた兵士たちもニーダマの様子に力を得たのか、降り注ぐ火の粉の中で弓を構えました。

「もう、お前たちの好きにはさせんぞ。禍々しい力で人間の勇気を試そうとしても無駄だ。さあ、姿を見せろ、卑怯者めが！」

ニーダマの顔には、歪んだ笑みが浮かんでいました。兵士たちはじつと、弓を構えたままで息を詰め、いつたいこれから何が起ころうとしているのかを待っていました。

すると、岩山の向こうから飛んで来ていた炎の雨が止みました。そして、いつの間にか岩山の下には五人の魔女が立っていました。

「わたしたちは逃げも隠れもしないよ。あんたたちが怖いのかって？ 臆病だつて？ あっはっはっはっはっは！」

「お前がザネリか？」

吐き捨てるように言うニーダマを、ザネリがにらみつけます。

「あんた。その言いようは、エックエックの王ニーダマだね。自分たちの力のほどもわからないような人間が私たちに食ってかかるだなんて、いったいぜんたい世界はどうなっちまったんだらうねえ？」

そう言つて、ザネリは両手を高々とかざします。

「そんなことだから、守り神と獣の区別もつかないんだ。わたしはほんとうに許さないからね。ここへのこのこやって来たのが運の尽きさ、ゼウオーラの悲しみを喰らうがいい！」

ザネリの指先から青い炎が噴き出すと、身動きひとつしないニーダマに襲いかかったのです。

「うわあああ！」

あまりの熱さにニーダマはのけぞり、仰向けに倒れて地面をごろごろと転げ回りました。

青い炎に灼かれた髪の毛が焦げた臭いを発しても、鼻の頭がひりひりと痛んでも、ニーダマは畏れをなしません。そうです、ニーダマは知っていたのですから。魔女が、決して人間を傷つけてはならないことを。

でも、でも……、ニーダマは、そのことのほんとうの理由までは知りませんでした。

無表情にニーダマを見下ろすザネリをにらみ返し、ニーダマはにやりと口元をゆがめました。

〈 つづく 〉